

「憧れ」を追って

6A T.M

私はこの春休みに二つのことにピリオドを打ちました。一つは五年間続けてきた部活です。部活は辞めたというより、引退の時がきてしまいました。入部前、バドミントンは遊び程度にしかやったことのない私ですが、今ではペアを組みダブルスの試合もできるようになりました。五年前の私が自分がここまでできるようになったと知ったら、さぞ驚くことでしょう。部活は週3、4回あり、それを五年間続けてきました。中2の時の初めての合宿では、指示を受けてからの動きが遅いなど基本的なことで怒られ続け、自分たちの未熟さを痛感しました。しかし、技術面では今までできなかったメニューを達成でき、成長を感じることもありました。

昨年度は部活の最高学年として、部長を務め、部活全体や後輩の面倒をみる機会が多くありました。それぞれに試合や合宿に向けて気持ちを高める緊張感のある雰囲気が感じられましたが、練習に取り組む姿勢に温度差が見られた時期などもあり、部長してどう対応したらよいか思案することもありました。また、本番でなかなか実力がでない後輩、手術をし、動けない期間が長かった後輩など、それぞれが壁にぶつかっている様子がわかりました。なんと声をかけたらいいかわからず、困ったこともありましたが、安心してもらえるように声をかけたつもりです。

引退が近くなると、私が部長として何を部活にもたらせたのかと考え、恵泉バドミントン部をそして部活とは何なのかという問いと向き合うようになりました。私が部活で得たことは、たくさんありますが、一番に挙げるとすると、五年間一緒に部活をしてきた仲間や先輩、後輩との出会いです。正直にいうと、恵泉のバドミントン部は公式戦などでは負けてばかりです。試合に勝てていればもっと嬉しかったし、楽しかっただろうとも、想像し、悔しく思うこともありましたが、メリハリのある毎日を過ごし、魅力的なメンバーとともに部活ができたことを幸せに思います。辛いこと苦しいことに仲間と共に立ち向かい、乗り越えていくのが、部活の醍醐味であると気付いたのは、客観的に部活を見られるようになった今年の一月ごろだったように思います。何にも代えがたい家族のような関係を築けた今、これからもこの関係を続けていきたいと願うばかりです。

私が辞めた二つ目のことは、習い事のダンスです。五歳のときに出

会ったある一人の先生のもとで、約十年間続けてきました。私は覚えていませんが、自分からやりたいと言い、自宅近くのスタジオに通い始めました。そこで私はダンスの虜になっていきました。発表会やコンテストに出たり、オーディションを受けたり、団体で一つの作品を作り上げる楽しさをダンスを通して感じました。中学受験のため小学五年生で一度辞め、中学二年生のころに再び始めました。部活とダンスを両立し、勉強を続けていくには、どれかが犠牲になることもあり、精神的に辛かったこともありましたが、どちらも好きで続けたいという欲張りな思いがあったので、途中で折れることなく続けてこられました。小学生のときも、中学高校で再開した後も、様々なジャンルに挑戦し表現の幅を広げることや、スタジオの先生を始めとする、カッコいいダンサーに近づくことが私の目標であり、私がダンスを続ける理由です。「です。」と現在形で言ったのは、今は辞めてしまいましたが、まだまだ私のダンスには課題があり、十七年の人生のうち、半分以上も続けてきたダンスをこのままで終わりにしてしまうのは、もったいないと思っているからです。ダンスでお金を稼ぐことができなくても、自分が踊れるのなら、踊っていたいと思うし、それが私を今まで導いてくれたスタジオや先生に報いることだと考えています。

私の個人的な話ばかりしてきましたが、私が部活とダンスを続けてこられたのは、周りの人の支えがあったことはもちろん、私に「憧れ」という強い気持ちがあったからだと思います。みなさんには「憧れの人」がいますか。「憧れ」というのは、誰もが一度は抱いたことのある感情だと思います。物語の世界やテレビの画面の中の人、自分より能力のある人などに憧れることが多いでしょうか。

私が一年生のころ、バドミントン部の五年生は、一番年の離れた先輩でありながら、厳しくも親しくも接してくださる「お姉さんの存在」でした。部活を楽しみ、カッコよくプレーする姿はまさに「憧れ」そのものでした。また、ダンスでは十二年前から教えてもらっていた先生や海外のアーティストのバックダンサーなどを見て、憧れてきました。「憧れ」は私に部活やダンスを頑張る力を与え、「憧れ」のその人自身となることは不可能でも、その人を目指し、近づこうとする中で、辛い練習を乗り越え、技術を身につけ、「憧れ」のその人にはない自分特有の個性や表現を獲得してきたように思います。気が付くと、部活では、私たちがあのころ憧れていた先輩方と同じ学年になっていました。引退の時に後輩からもらったアルバムや手紙には、

嬉しいことに「先輩は憧れでした。」や「かっこよかったです。」などと書いてくれていました。また、習い事を辞めるときにも、手紙を受け取ったのですが、「しばらく会えないのはさみしい」などと綴ってありました。たとえお世辞でもそう言ってもらえるのはありがたいことで、自分が他人にそんな風に思われているとは驚きでした。私の場合は前に述べたように「憧れ」の存在が私に刺激を与え、私を上達へと導いてくれるものでした。私を「憧れ」だと思ってくれた人の何かの力になれば、幸いだと思う一方、これからもそれに恥じぬよう「憧れ」る心を失わずに、豊かな人間になっていきたいです。

自分の刺激になるものや、諦めずに頑張ろうと思わせる原動力は人によっても、こなすことの内容によっても違うと思います。学校行事などでも、誰かが頑張っているから自分も協力しよう、負けるのは嫌だから精一杯やろうという気持ちになったことがある人も多いでしょう。逆に、苦手だから私はやらないほうがいと消極的になる必要はないと思います。今私が読んでいる感話も書いてみます、と言ったものの、やはり私には無理だと思い、途中で投げ出しかけましたが、友人のフォローもあり、自信はありませんが何とか書きあげることができました。人間は、追い込まれたら、意外な力を発揮することができるものかもしれません。

過去にダンスに通う回数を増やしたいと思ったことがありました。しかし、小学生のころとは違い、スタジオに通わせてもらっているだけでありがたいという意識があり、わがままを言おうとする自分が嫌い、両親に相談することはできませんでした。しかし、部活で「出しゃばらざる者打つべからず」と教えられました。私なりに積極的に参加しない人は打つ資格がないと解釈しています。思っているだけでは何も変わらないのです。ダンスでも、下手だからといって恥ずかしくて、先生の動きがよく見えない後ろの方でレッスンを受けるのと、先生の横で動いているのでは吸収できることも変わってきます。意志や決意をもって行動することは、理想像や「憧れ」に近づく第一歩につながっています。いつも同じ環境にいることは楽で、慣れ親しんだ環境を変化させるには、エネルギーが必要です。そのエネルギーはもとをたどると「憧れ」と言えるのではないのでしょうか。何か「憧れ」てそれに近付きたいと願い、「自分を変えよう」と思い、それが「行動」するエネルギーとなる。そう考えてからは、大胆に行動を起こすことができるようになったと思います。「憧れ」から生まれ

た行動するエネルギーは、私の高校生活を充実したものにしてくれました。私に「憧れ」を与えてくれた尊敬する先輩や先生方、そばで支えてくれた友人、そしてやりたいことをやらせてくれた両親に感謝しています。部活からもダンスからも離れた今、具体的な「憧れの人」はいませんが、自分の中にある理想像に向かって、一歩ずつ歩んでいきたいと願っています。